

## 長崎県レッドリスト2022の公表について

### 1. レッドリスト改訂・公表の目的

生物多様性保全のための基礎資料である長崎県レッドリスト（県内における絶滅のおそれのある野生動植物を選定・評価したもの）について、平成28年度に行った中間見直しから5年間の経過したことから、それ以降の状況を反映させた改訂を行い、「長崎県レッドリスト2022」としてとりまとめました。

このリストの公表を通じて、希少な野生動植物の保護と生息・生育環境の保全に資することを目的としています。

### 2. レッドリスト改訂の経緯

- 平成10年度～12年度 レッドデータブック作成作業
  - ・平成13年3月 長崎県レッドデータブック2001 発行
- 平成20年度～22年度 レッドリスト改訂作業
  - ・平成23年3月 長崎県レッドリスト（平成23年改訂）公表
    - ※同年6月 一部修正（維管束植物）
  - ・平成24年3月 長崎県レッドデータブック2011（普及版）発行
- 平成28年度 レッドリスト中間見直し
  - ・平成29年8月 長崎県レッドリスト（中間見直し版）公表
- 令和2年度～令和3年度 レッドリスト改訂作業
  - ・令和4年3月 長崎県レッドリスト2022 公表

### 3. 選定・評価の方法など

令和2年度から令和3年度にかけて設置した「長崎県レッドリスト改訂検討委員会」における議論を中心に、希少野生動植物モニタリングの調査結果や新たな知見等に基づき、選定・評価を行いました。

#### (1) 評価対象範囲

- ・長崎県レッドリストに掲載された野生動植物種
- ・県内において新たに絶滅の危機に瀕していることがわかった野生動植物種
  - ※環境省レッドリスト掲載種（県内に生息・生育する種）は全て評価の対象としました。

#### (2) 対象分類群（12分類群）

- (1) 維管束植物 (3) 藻類 (4) 哺乳類 (5) 鳥類 (6) 爬虫類
- (7) 両生類 (8) 魚類（淡水魚類・浅海魚類） (9) 海産哺乳類
- (10) 甲殻類・剣尾類等 (11) 貝類 (12) クモ類 (13) 昆虫類

※（2）蘚苔類については生育状況を把握する体制が整わず、今回の評価は見送りました。

### (3) 「種」の取り扱いについて

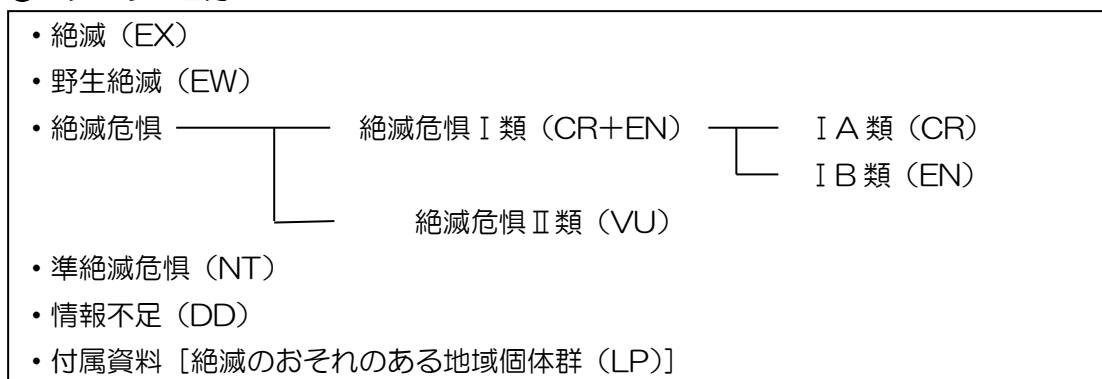
原則として「種」及び「亜種」を対象範囲とし、変種・移入種・「迷い」によって確認された種については含まないこととしました。

※維管束植物については、変種までを対象としました。

### (4) 選定・評価の基準

環境省レッドリストカテゴリーと判定基準（2020）に準拠しました。

#### ①カテゴリー区分



#### ②カテゴリー定義

- ☆絶滅 (EX : Extinct )  
長崎県ではすでに絶滅したと考えられる種
- ☆野生絶滅 (EW : Extinct in the Wild )  
飼育・栽培下でのみ存続している種
- ☆絶滅危惧 I 類 (CR+EN)  
絶滅の危機に瀕している種  
現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの
  - ◇ I A 類 (CR : Critically Endangered )  
ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
  - ◇ I B 類 (EN : Endangered )  
I A 類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
- ☆絶滅危惧 II 類 (VU : Vulnerable )  
絶滅の危険が増大している種  
現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの
- ☆準絶滅危惧種 (NT : Near Threatened )  
存続基盤が脆弱な種  
現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに以降する要素を有するもの
- ☆情報不足 (DD : Data Deficient )  
評価するだけの情報が不足している種
- ☆絶滅のおそれのある地域個体群 (LP : Threatened Local Population )  
地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの

## (5) 選定・評価の体制

選定・評価に当たっては、長崎県レッドリスト改訂検討委員会の委員及び協力者の皆様に、多くの協力及び指導等をいただきました。

### ○長崎県レッドリスト改訂検討委員会 委員の皆様

役職	担当分野		氏名	職業・役職
会長	植物	維管束植物	中西 弘樹	長崎大学 名誉教授
副会長	哺乳類・両生類・爬虫類		松尾 公則	長崎女子短期大学 教授
委員	植物	維管束植物	千々布 義朗	(株)肥後測量設計長崎営業所所長
委員	植物	藻類	飯間 雅文	長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科 准教授
委員	鳥類		谷口 秀樹	日本野鳥の会 長崎県支部
委員	魚類 (淡水魚類・浅海魚類)		深川 元太郎	(公社)長崎県食品衛生協会 食品環境検査センター 食品検査課 課長
委員	甲殻類		中原 泰彦	西部環境調査株式会社
委員	貝類		川内野 善治	ふるさと自然の会 会長
委員	クモ類		奥村 賢一	国立科学博物館動物研究部
委員	昆虫	水生昆虫	大庭 伸也	長崎大学教育学部 准教授
委員	昆虫	甲虫類	松尾 照男	長崎昆虫研究会 会員
委員	昆虫	鱗翅類	西澤 正隆	長崎昆虫研究会 会長

### ○協力者の皆様

担当分野	氏名	職業・役職
藻類	桑野 和可	長崎大学水産学部 教授
哺乳類・両生類・爬虫類	川内野 善治	ふるさと自然の会 会長
鳥類	寺島 正彦	日本野鳥の会長崎県支部 事務局長
	山口 雅生	日本野鳥の会長崎県支部 幹事
魚類	小原 良典	長崎県小学校 教諭
	川久保 晶博	させぼパール・シー(株) 西海国立公園九十九島水族館 館長
	宮木 廉夫	県総合水産試験場加工科 科長
甲殻類	大谷 拓也	ふるさと自然の会 会員
	樋口 一成	長崎県生物学会 会員
貝類	福田 宏	岡山大学大学院環境生命科学研究科 准教授
昆虫類	境 良朗	長崎昆虫研究会 会員
	田中 清	長崎北高校・長崎西高校 非常勤講師
	山元 宣征	長崎昆虫研究会 会員
	中島 充也	長崎昆虫研究会 会員
	峰 正隆	長崎昆虫研究会 会員

#### 4. 長崎県レッドリスト 2022 の概要

##### (1) 総括表

○長崎県レッドリスト 2022 の掲載種は、合計 1,449 種（維管束植物 548 種、蕨苔類 34 種、藻類 12 種、脊椎動物 234 種、無脊椎動物 621 種）となりました。

○分類別・カテゴリー別に整理した総括表は以下のとおりです。

長崎県レッドリスト 2022 総括表

分類群	カテゴリー								総計
	絶滅 (EX)	野生絶滅 (EW)	絶滅危惧 I A 類 (CR)	絶滅危惧 I B 類 (EN)	絶滅危惧 II 類 (VU)	準絶滅 危 惧 (NT)	情報不足 (DD)	絶滅のおそれ のある地域個 体群 (LP)	
維管束 植物	28 (21)	0 (0)	96 (103)	160 (151)	135 (134)	105 (146)	24 (15)		548 (570)
蕨苔類					2 (2)	26 (26)	6 (6)		34 (34)
藻類			1 (1)	1 (1)		9 (9)	1 (1)		12 (12)
哺乳類			3 (3)	2 (1)	2 (5)	6 (8)	8 (3)	0 (1)	21 (21)
鳥類	1 (1)		29 (19)	9 (12)	34 (28)	33 (55)	23 (0)		129 (115)
爬虫類				3 (3)	2 (1)	5 (7)	2 (2)		12 (13)
両生類			1 (1)	3 (2)	3 (3)	4 (5)			11 (11)
魚類	6 (1)		10 (13)	6 (4)	10 (13)	15 (19)	11 (10)	2 (5)	60 (65)
海産 哺乳類				1 (1)					1 (1)
甲殻類・ 剣尾類他			4 (5)	7 (8)	3 (7)	14 (22)	5 (6)		33 (48)
貝類	2 (2)		47 (40)	44 (46)	68 (65)	71 (72)	14 (13)		246 (238)
クモ類						8 (8)	2 (2)	1 (1)	11 (11)
昆虫類	2 (1)		49 (61)	43 (72)	107 (85)	85 (83)	36 (14)	9 (9)	331 (325)
総計	39 (26)	0 (0)	240 (246)	279 (301)	366 (343)	381 (460)	132 (72)	12 (16)	1,449 (1,464)

※ ( ) 内は改訂前 (H29 公表版) の数値

## (2) 今回改訂のポイント

### ①全体の概要

- 掲載種の総数は、1,449 種（新規掲載種：86 種、削除された種：101 種）となり、平成 29 年に公表した掲載種数（1,464 種）から 15 種減少しました。
- モニタリングによって生息・生育状況に関する知見の蓄積が進んだ結果、新たに選定された種やカテゴリーが変更された種、削除された種が多くみられました。一方で、生育状況の確認ができずに評価できなかった分類群（蘚苔類）があったほか、判断材料となる情報が得られずに情報不足（DD）とされた種の増加もみられました。
- 絶滅及び絶滅危惧種（EX+CR+EN+VU）の種数は 924 種となり、前回の種数（916 種）から 8 種増加しました。カテゴリー別では、絶滅（EX）：39 種（前回 26 種）、絶滅危惧 I A 類（CR）：240 種（前回 246 種）となり、本県の野生生物が置かれている状況は依然として厳しいことが明らかとなりました。
- 新たに絶滅（EX）と判断された種は、維管束植物：9 種（コウヤワラビ、ミヤマムギランなど）、魚類：5 種（オヤニラミ、カネヒラなど）、昆虫類：1 種（トゲムネミヤマカミキリ）の 15 種でした。一方で、絶滅したと判断されていた種の再発見もありました（維管束植物：フジシダ、チャボイ）。
- 主な減少要因としては、開発や盗掘による生息・生育環境等の改変、ニホンジカによる食害、水田や草原など二次的自然の荒廃、外来種による捕食などが挙げられました。

### ②分類群ごとの特徴（カテゴリーに変更等があった主なもの）

#### ○維管束植物

- ・対馬に生育するハナナズナ（CR）やカラクサシダ（EN→CR）などの多くの種において、ニホンジカの食害による個体数の減少が確認されました。
- ・草原に生育するオキナグサ（CR）やダイサギソウ（EN）、フシグロ（新 VU）などの種において、野焼きが行われなくなった影響による個体数の減少が確認されました。
- ・南方系植物であるグンバイヒルガオ（CR→EN）やヘゴ（EN→VU）などの生育分布の拡大が見られるなど、地球温暖化の影響が示唆されるような状況も確認されました。

#### ○哺乳類

- ・対馬産のシベリアイタチは地域個体群（LP）ではなく絶滅危惧種（EN）として評価され、ツシマテン（NT）は安定的な生息が確認されるためリストから削除されました。
- ・平成 29 年以降、対馬において痕跡等が確認されているユーラシアカワウソは、情報不足（DD）として新たに掲載されました。

#### ○鳥類

- ・水田の荒廃や乾田化に伴う水場環境の減少によって、魚貝類を主な餌とするコサギ（新 DD）やゴイサギ（新 NT）などの個体数の減少が確認されました。

#### ○両生類

- ・水田の荒廃や乾田化に伴う水場環境の減少によって、ヤマアカガエル（VU→EN）やニホンアカガエル（NT→VU）、ツチガエル（新 NT）などの個体数の減少が確認されました。

#### ○魚類

- ・河川や海岸の開発等の影響によって、アリアケギバチ（VU→EN）やトビハゼ（VU→EN）などの個体数の減少が確認されました。

○甲殻類・剣尾類等

- ・ハクセンシオマネキ (NT→削除) やテナガエビ (NT→削除) など多くの種で安定した産地が確認されたため、カテゴリーの変更やリストからの削除が行われました。

○貝類

- ・河川工事の影響によるタケノコカワニナ (EN→CR) の個体群の減少、干潟の喪失によるシマヘナタリ (CR) やウミマイマイ (CR) などの個体数の減少が確認されました。

○昆虫類

- ・水田や草原などの二次的自然の荒廃によって、ベッコウトンボ (CR) やタイコウチ (NT→VU) などの水生昆虫、ジャノメチョウ (新 VU) などの草原性の鱗翅目の減少が確認されました。
- ・クロトビイロカメムシ (新 CR) やセスジガムシ (新 CR)、スジグロボタル (新 VU) など多くの種が、新たに掲載されました。



オキナグサ (CR)



ヘゴ (EN→VU)



ゴイサギ (新 NT)



ニホンアカガエル (NT→VU)



タケノコカワニナ (EN→CR)



タイコウチ (新 VU)

### (3) 生きもの図鑑（代表的な種）

長崎県レッドリスト改訂検討委員会委員の皆様に、長崎県レッドリスト2022 に掲載された代表的な種について、写真を交えて解説していただきました。

#### 【維管束植物】

##### カンラン（ラン科）

【絶滅危惧ⅠB類（EN）→絶滅危惧ⅠA類（CR）】



照葉樹林の林床に生育するランで、古くからマニアによって盗掘されている。分布は東海地方以西の本州、四国、九州、琉球列島と広いが、各地で絶滅してしまい、今では花が咲くような成株はほとんど見られなくなった。長崎県の生育地は県外のマニアにも対象となっていたが、近年になって採集庄は減りつつある。最近になってイノシシの掘り起こしによっていくつかの生育地が消滅しており、残された生育地も絶滅が危惧される。

（中西弘樹）

##### ヤマコンニャク（サトイモ科）

【絶滅危惧Ⅱ類（VU）→絶滅危惧ⅠB類（EN）】



照葉樹林に林床に生育する多年草で、五島が分布の北限である。生育地は少ないが、盗掘の対象とはならず、森林の伐採などが減少の主要因であった。しかし、最近になってシカの食害によって林床が裸地化し、表土が流出したり、土壌が貧栄養化し、シカに食べられない本種も衰退してきた。（中西弘樹）

##### コモウセンゴケ（モウセンゴケ科）

【準絶滅危惧種（NT）→絶滅危惧Ⅱ類（VU）】



湿った崖地などに生育する小型の多年草。長崎県は九州の中で一番生育地が多い。県内では西彼杵半島の中部から大崎半島（川棚町）までの狭い範囲に分布しているが、生育地はかなり多かったが、最近の水田の放棄によって水田の縁や土手の下部などの生育地の草刈りが行われなくなり、他の草本が繁茂し、消失している。

（中西弘樹）

**ヘゴ (ヘゴ科)**

【絶滅危惧ⅠB (EN) → 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)】



五島では古くから北限自生地として知られ、国指定の天然記念物に指定されている生育地もある。以前から盗掘が行われ、一時期かなり個体数が減少したが、最近になって本土側にも生育地が発見され、温暖化の影響か個体数は多くなっている。本種は空中湿度が高い谷に生育するため、森林の伐採などの影響を受けやすく、砂防工事によって乾燥化し、絶滅した生育地もある。(中西弘樹)

**リュウビнтаイ (リュウビнтаイ科)**

【絶滅危惧Ⅱ類 (VU) → 準絶滅危惧種 (NT)】



古くから五島ではヘゴと共に南方系のシダとして知られ、県の天然記念物に指定されている生育地もある。孢子で繁殖するので、谷の切り通しなどにも先駆的に侵入し、定着できる。最近になって温暖化のせい、五島では各地で多くの個体が見られるようになった。本土側では長崎市に1カ所の生育地があるだけである。(中西弘樹)

**オキナグサ (キンボウゲ科)**

【絶滅危惧ⅠA類 (CR) → 絶滅危惧ⅠA類 (CR)】



日当たりのよい乾いた草原に生育する多年草。茎や葉などは長い白毛に覆われる。4月頃、鐘形をした暗赤紫色の花を下向きに付ける。花を開く時の花茎の高さは10cm程度であるが、開花後は伸長して30~40cmになる。かつては県本土部の各地で見ることができたが、草原の減少とともにオキナグサの生育地も失われ、また盗掘の対象にもなり、最近の確実な生育情報は県北地区に1カ所、県南地区に1カ所の2カ所のみである。最も絶滅のおそれの高い植物の一つと言える。(千々布義朗)



**ダイサギソウ (ラン科)**

【絶滅危惧 I B 類 (EN) → 絶滅危惧 I B 類 (EN)】



日当たりのよい草原に生える多年草。茎高 30～60 cm で、湿原に生えるサギソウよりも草丈は大きく、丈夫な印象を受ける。花期は 8～9 月で茎の上部に径 2～2.5 cm の白い美しい花を複数つける。花が美しいことから盗掘の対象になっている。また、過疎化の進行等により野焼き等草原の維持管理が困難となっており、生育地が失われ個体数が急激に減少している。県内では県南、県北、東彼地区で生育が確認されているが、個体数は極めて少ない。(千々布義朗)

**フシグロ (ナデシコ科)**

【絶滅危惧 II 類 (VU) ※新規】



日当たりのよい草原や林の縁などに生える越年草。草丈は 30～100 cm で直立する。6～9 月、長さ 1.0 cm 弱の白い小さな花をつける。ナデシコ科では比較的大型あるが、花が小さいこともありあまり目立たず存在ではない。以前は特に珍しい植物ではなかったが、草原の消滅とともに、本種も姿を消しつつある。今のところ、県北、県南地区で生育が知られているが、過疎化の進行等により草原の管理が放棄されるところが多くなり、近い将来における絶滅が心配されている。(千々布義朗)

**【藻類】**

**オキチモスク (チスジノリ科)**

【絶滅危惧 I A 類 (CR) → 絶滅危惧 I A 類 (CR)】



**【種の特徴】**

本種は多くの分枝をもつ、体長 10～40cm ほどの糸状淡水紅藻である。湧水付近や河川上流のきれいな浅い川底の大小の石の表面や護岸の側面などに生育する。12 月初旬に出現し、1～4 月に繁茂し、5 月以降夏季消失。主に単孢子による無性生殖により繁殖する。

**【生息生育情報】**

長崎県内では、雲仙市国見町神代川支流釜蓋川の一部のみに生育しているが、2021 年までのここ 10 年間でかなり減少し、危機的状況にある。

**【生息生育に対する脅威】**

絶滅寸前までの激減は、釜蓋川の水質汚濁が主な原因と考えられる。(飯間雅文)

**アサクサノリ（ウシケノリ科）**

【絶滅危惧 I B 類（EN）→絶滅危惧 I B 類（EN）】



【種の特徴】

葉体は楕円形で内湾の河口域の潮間帯上部の種々の基質上に生育する。生育期は冬から春。夏季は貝殻穿孔糸状体（コンコセリス期）として生育する。昭和 30 年代（1960 年代前半）まで養殖ノリの主流種であったが、現在ではスサビノリが主流種となり、アサクサノリ野生株は絶滅危惧種となっている。

【生息生育情報】

長崎県では、佐世保市周辺および平戸市のいくつかの河川の河口域で生育が確認されている。

【生息生育に対する脅威】

内湾の干潟の埋め立て、干拓など。

（飯間雅文）

**ツクシホウズキ（フジマツモ科）**

【準絶滅危惧（NT）→準絶滅危惧（NT）】



【種の特徴】

体は高さ 1cm、茎部と根茎は直径約 1mm、球形、卵円形の膨らんだ上部は、直径 2.5-3mm。潮間帯上部の岩の割れ目に生育。生育期は冬。

【生息生育情報】

長崎県では、長崎市野母崎町田の子島海岸 1 地点の岩上のみで生育が確認されている。10 年前の 2011 年頃には、長崎市弁天白浜海岸でも生育が確認されていたが、ここ数年は生育確認されていない。また野母崎町田の子島海岸でも最多で 8 か所の岩上で確認されたが、2021 年度は 1 か所の岩で確認されたのみである。

【生息生育に対する脅威】

海岸の開発、海洋汚染など。

（飯間雅文）

## 【哺乳類】

ヤマネ (ヤマネ科)

【絶滅危惧Ⅱ類 (VU) → 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)】



国の天然記念物に指定されている日本の固有種である。九州、四国、本州に広く分布するが、長崎県では多良山系だけで確認されている。体長 7 cm 程度で、ふさふさとした長いしっぽと、背中中央に黒い太い線が特徴である。夜行性で樹上を生活場所としているので、人目に触れることはめったにない。冬眠する哺乳類として有名。轟の滝付近では平均気温が 5℃ を下回る 2 ヶ月間だけ冬眠することが分かっている。(松尾公則)

## 【鳥類】

シロチドリ (チドリ科)

【準絶滅危惧 (NT) → 絶滅危惧ⅠA類 (CR)】



本種は、長崎県では冬鳥として飛来するものが多く、特に諫早湾の干潟には 2 千羽を超える群れが見られ、日本有数の飛来地であった。諫早湾の干潟が消失したことに伴い激減した。現在では各地に少数が飛来するだけである。また、島原や平戸などの砂浜、造成地で少数が繁殖している。しかし、造成地は開発のため安定した繁殖地とはなり得ず、平戸の繁殖地も現状は不明である。

(谷口秀樹)

ハマシギ (シギ科)

【準絶滅危惧 (NT) → 絶滅危惧ⅠA類 (CR)】



本種は、長崎県では冬鳥として各地に飛来し越冬している。特に諫早湾の干潟には 1 万 2 千羽もの群れが飛来したことが有り、日本有数の飛来地であった。前種同様諫早湾の干潟が消失したことに伴い激減した。現在では各地で少数が越冬するだけである。その飛来地も減少し、毎年観察されるのは大村湾沿岸などに限られている。

(谷口秀樹)

**ブッポウソウ（ブッポウソウ科）**



【絶滅危惧ⅠA類（CR）→絶滅危惧ⅠA類（CR）】

本種は、長崎県では旅鳥として主に春の渡り時期に観察される。また、ごく少数が対馬の数カ所で繁殖していたが、近年は確認されていない。営巣に適した樹洞のある森林の減少や越冬地である東南アジアの森林環境悪化などから全国で飛来数は減少している。近年、営巣木の代わりに巣箱を設置する活動が岡山などで行われ、そこでの飛来数増加が見られるようになったことは朗報である。

（谷口秀樹）

**ゴイサギ（ペリカン科）**

【準絶滅危惧（NT） ※新規】



本種は、長崎県では留鳥として各地で見ることができる。以前は、各地で普通に見られ、繁殖もしていた。長崎市の銅座川では毎年のように群れが見られ、話題になっていた。しかし、魚などの餌資源の減少から近年非常に稀な鳥になっている。繁殖の際は集団で行うため、鳴き声のうるささと糞などの悪臭から嫌われ、追われることも一因のようである。

（谷口秀樹）

**【両生類】**

**ニホンアカガエル（アカガエル科）**



【準絶滅危惧（NT）→絶滅危惧Ⅱ類（VU）】

県本土・壱岐に広く分布する。成体は赤銅色をしており、5 cm程度の中型のカエルである。成体は山中や草原で生活しているが、産卵は山際の水田や湿地で行う。冬季に一時的に冬眠から覚め、産卵場となる水場へ移動するが、その水場である水田や湿地がなくなってきた。産卵する場所の不足や、産卵しても幼生が生き続けるための長期間の水の確保が難しいため、個体数が減少し続けている。（松尾公則）

## 【爬虫類】

### ニホンイシガメ（イシガメ科）

【絶滅危惧ⅠB類（EN）→絶滅危惧ⅠB類（EN）】



日本の固有種である。黄褐色の体色で、甲羅の後ろがギザギザしているのが特徴で、首の周りには、草色の紋様や赤い斑紋はない。以前は、長崎の河川やため池を中心に広く生息していたが、外来種であるクサガメやミシシippアカミミガメの侵入により激減してきた。現在生息している地域は、壱岐や五島福江島だけであり、県本土の確認は飼育個体か遺棄されたと思われるものばかりである。（松尾公則）

## 【魚類】

### オヤニラミ（ケツギョ科）

【絶滅（EX）

※新規】



オヤニラミ（佐賀県産）

グラバー図譜編纂者である倉場富三郎氏が所持していた資料や、長崎県師範学校（長崎大学の前身）の刊行物に本種の記載があり、前回公表直前に文献を入手したため、掲載を見送っていたが、現地に本種の方言が残っていること、淡水魚の中で混同しやすい種がないことから、今回絶滅として掲載した。文献の記述には波佐見川に生息とあるので、川棚川水系の上・中流側に生息していたものと考えられる。

（深川元太郎）

### シロチチブ（ハゼ科）

【絶滅危惧Ⅱ類（VU）→準絶滅危惧（NT）】

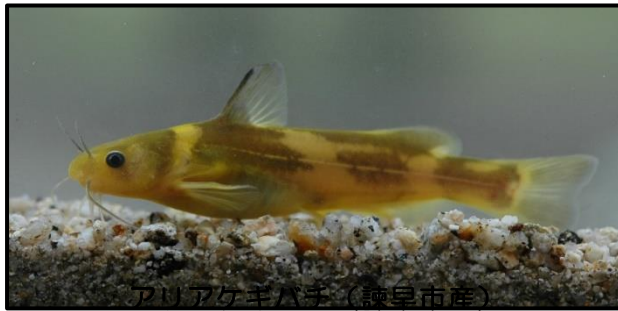


シロチチブ（雲仙市産）

これまで、少数個体が諫早湾の数カ所で確認されている状況であったが、新たに確認していた地点より諫早湾奥側の干潟で多くの個体が確認された。確認された干潟はアサリの潮干狩り場として初夏に開放されている場所で、転石が干潟各所にあり、貝殻片が混在した砂礫質であり、現在の諫早湾沿岸ではこのような干潟が大部分であることも加味して、評価を行った。（深川元太郎）

**アリアケギバチ（ギギ科）**

【絶滅危惧Ⅱ類（VU）→絶滅危惧ⅠB類（EN）】



日本固有種で、九州各県の河川中流域の自然度が高い区域に分布する。隣県では、佐賀県松浦川、塩田川、熊本県菊池川、緑川などで確認されている。本県では、諫早市の本明川など数河川、大村市の2河川、川棚川、佐世保市、杵岐に分布の記録がある。しかし、ここ十数年にわたる調査でも、佐世保市、杵岐および大村市よし川といった複数河川で確認できなかった。また、健全な生息環境のある郡川でも見つけるのが困難になっている。河川改修や堰堤の設置等による河川環境の変化、水質の悪化などが本種の生息状況を逼迫している要因と考えられる。

（小原良典）

**【甲殻類他】**

**ミナミヌマエビ（ヌマエビ科）**

【情報不足（DD）→情報不足（DD）】



各地の流れの緩やかな河川や水路、池に生息している。外来種品ヌマエビと交雑し、雑種が生まれ、純粋種の生息状況がよくわかっていない。現在、純系のミナミヌマエビが確認されている地域は五島市および川棚町のみである。シナヌマエビは釣り餌や鑑賞用として輸入されており、餌の余りや飼育できなくなった個体の放流により各地で増えている。（中原泰彦）

**イキシマカワリヌマエビ（ヌマエビ科）**

【準絶滅危惧（NT） ※新規】



2017年に杵岐市で発見され新種として記載された。形態はミナミヌマエビとよく似ており、やや小型で額角がやや短く、色彩の変化があまり大きくない。

杵岐島のみから知られるが、九州本土で発見される可能性がある。杵岐では小さな河川や用水路で見られる。今後、外来種の放流等があれば純粋種の存在が危ぶまれる。（中原泰彦）

**スジエビB型（テナガエビ科）**

【絶滅危惧Ⅱ類（VU）→準絶滅危惧（NT）】



池などに生息するスジエビとよく似ているが、スジが太く体が大型になる。卵が小さいため両側回遊型であると思われ、スジエビとは別種である可能性が高い。主に河川の下流域や汽水域に生息するが、分布が限定されている。県内では五島市および対馬市でみられ、1990年代には長崎市内の宮摺川にも生息していたが近年は確認できていない。（中原泰彦）

**【貝類】**

**タケノコカワニナ（トゲカワニナ科）**

【絶滅危惧ⅠB類（EN）→絶滅危惧ⅠA類（CR）】



【分布】

本州（房総・男鹿半島以南）、四国、九州、南西諸島、台湾、フィリピン、マレーシア、ニューギニア、ソロモン諸島、インド、マダガスカル。県内：北松浦半島、久賀島、平戸市、大村市、諫早市。

【種の特徴・生息環境】

別名ムチカワニナ。殻長約70 mm、殻径約25 mm、カワニナに似るがより細長く、殻頂は尖り、螺層の膨らみは弱い。河口部汽水域の砂礫混じりの軟泥底に生息し、緩い流水中や止水中を好む。卵から孵化後にベリジャー幼生となるが、その浮遊期間は著しく短い可能性があり、生息地の下流に堰などが形成されると幼生の伝播が妨害され、個体群の消滅に直結する恐れがある。

【生息生育に対する脅威】

河川改修・護岸工事、河口堰の建設、堆積土砂の除去、水質汚濁。

（川内野善治）

**ヤベガワモチ（ドロアワモチ科）**

【絶滅危惧 I A 類 (CR) → 絶滅危惧 I A 類 (CR)】



【分布】

有明海・八代海、韓国南西岸。県内：島原半島（有明海）。

【種の特徴・生息環境】

体長約 60 mm、体幅約 25 mm に達する大型のナメクジ状で殻を欠き、体は楕円形で背面は黒色、腹面は青磁色。大規模な内湾奥河口の軟泥干潟にのみ見られ、国内の既知産地は数箇所しかない。主に夜間に活動し、昼間は泥中に深く潜行していることが多いが、暖かく湿度の高い日は干潮直後であれば昼間でも見ることができる。諫早湾の閉め切りに伴い軟泥が減少したことなど、生息環境が著しく悪化して近年は確認出来なくなり、県内では絶滅した可能性がある。

【生息生育に対する脅威】

河口干潟の埋め立て・干拓、河川改修・浚渫・護岸、底質汚染、水質汚濁。

（川内野善治）

**オキヒラシイノミ（オカミミガイ科）**

【絶滅危惧 I A 類 (CR) → 絶滅危惧 I A 類 (CR)】



【分布】

日本海南西部～東シナ海沿岸、中国南部～ベトナム北部。県内：北松浦半島、平戸島、西彼杵半島。

【種の特徴・生息環境】

殻長約 25 mm、殻径約 15 mm、背腹に扁平された栗形で厚く、殻口内に強い歯状突起を持つ。河口や内湾奥飛沫帯の陸地に生じた樹木が水面へオーバーハングして昼間も木陰が形成される場所やヨシ原等において、湿った落葉や漂着物等の下でオカミミガイ等と同所的に見られる。国内の既知産地は数箇所しか残存しておらず、九州以北産オカミミガイ科貝類のうち最も絶滅が危惧される種。

【生息生育に対する脅威】

河口干潟の埋め立て・干拓・護岸改修、底質汚染、コレクターによる乱獲。

（川内野善治）



## 【クモ類】

### ワスレナグモ (シグモ科)

【準絶滅危惧 (NT) → 準絶滅危惧 (NT)】



雌雄双方とも大きな鋏角を持つがそれ以外の外見では性的二形が著しい。雌個体は大型で体色は灰褐色だが、雄は雌より小型で細身、体色は黒色である。環境省の準絶滅危惧種にも選定されており、東北から九州の広範囲に分布する。県内では大村市、諫早市、平戸市、西彼杵郡時津町での発見例がある。都市環境の日当たりの良い場所に適応したクモで、市街地の公園や墓地、時には住宅敷地内の芝生などにも生息する。こうした場所の地面に穴を掘って中に潜み、獲物が巣穴近くに来ると飛び出して捕獲するという習性がある。(奥村賢一)

### ドウシグモ (ハウシグモ科)

【情報不足 (DD) → 情報不足 (DD)】



体長 3~4mm で全体が黒色、腹部背側に 2 対、中央後方に 2 個の白斑を有する。西日本を中心に生息し環境省のカテゴリーでも情報不足種に選定されている。樹上で生活するとされているが、地表を徘徊する例も見受けられる。本種の初記録は長崎市内の若宮稲荷神社で 1950 年代に採集された事例であり、その後対馬でも確認された。本土での生息状況は長年不明であったが 2014 年に諫早市街地内で発見された。こうした事実から本種は山野に限らず、ある程度良好な森林環境が維持されていれば生息可能であることが確認できた。(奥村賢一)

### ゴトウヤチグモ (タナグモ科)

【絶滅のおそれのある地域個体群 (LP) → 絶滅のおそれのある地域個体群 (LP)】



雌雄ともに暗褐色で体長 10mm 前後、落ち葉中や石の下などの地表に生息する。五島列島の固有種で福江島、久賀島、奈留島、中通島の 4 島での生息が確認されている。各島の地史と位置関係から若松島にも生息しているはずであるが、これまでの複数回の調査では発見されていない。若松島と中通島は南部の 3 島に比べニホンジカの食害による林床の荒廃が進んでおり、徘徊性の本種に大きな影響を及ぼしている可能性がある。中通島でも個体数は極端に少なく、これまでに確認されている生息域はわずか 1 箇所のみである。(奥村賢一)

## 【昆虫類】

### タイコウチ (タイコウチ科)

【絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ※新規】



水田やその脇の流れの緩やかな水路、溜池を生息地とする大型の水生昆虫で、オタマジャクシや小さな水生昆虫などを捕食する。生活史を全うするのに常に水が残るような環境が必要であるが、稲作の放棄による陸地化、冬季に水が完全になくなるような水はけのよい水田は本種の生存にとって致命的である。また、恒常的に水がある環境でもアメリカザリガニなどの外来種が入ることの影響が大きい。以前見つかった場所でも年々確認されなくなっており、絶滅のリスクが高まっていると判断された。(大庭伸也)

### セスジガムシ (セスジガムシ科)

【絶滅危惧ⅠA類 (CR) ※新規】



(茨城産 渡邊黎也氏撮影)

国内では近畿の一部、関東の一部、そして九州では唯一、対馬に生息するという分布が特徴的な水生甲虫である。2020年に約18年ぶりに対馬から再発見され、現在も生息することが確認された。茨城の生息地は湿田で冬季も水が残る環境である。湿田内にできた浅い水たまりで冬～春に繁殖し、新成虫となるが夏にその姿を見ることはできない。対馬の生息地は1か所の河川氾濫原で、自然にできた水たまりである。このような環境は埋め立てられる可能性もあり、容易に絶滅する恐れがある。(大庭伸也)

### チンメルマンセスジゲンゴロウ (ゲンゴロウ科)

【絶滅危惧Ⅱ類 (VU) ※新規】



(渡部晃平氏撮影)

本州、九州、南西諸島などに分布する体長約5mmの小型のゲンゴロウ。分布域は比較的広いが産地は局地的である。長崎南部の生息地では、雨上がり後にできた水たまりで複数個体が出現する。幼虫期間も他の近縁種に比べて短いなど一時的に出現する水域で生活史を送っているものと考えられるが、植物が豊富な池に生息するという情報もあり、生態についてはまだまだ不明な点が多い種である。水はけの悪い土地で繁殖する種であるとする、そのような環境は開発の波にさらされやすいので絶滅が懸念される。(大庭伸也)

**カツラネクイハムシ（ハムシ科）**

【絶滅危惧 I A 類（CR） ※新規】



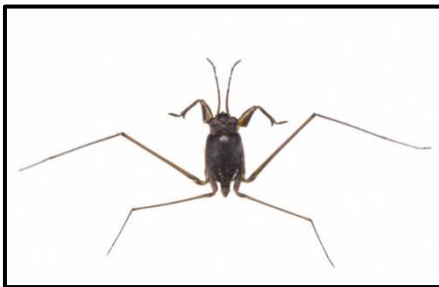
（カツラネクイハムシ 左：雄、右：雌）

体長 1 cm ほどの小さなハムシ類で、体色は美しい緑銅色の金属光沢をもつ。近畿地方以西から九州に及ぶが国内での産地は限られており、九州内では大分県に記録があるだけの種であった。長崎県内では、2005 年に初めて西彼杵半島の小規模の明るい一部湿地だけに限られ発生していることが確認された。湿地に生える植物のハリイ類やスゲ類を食草としていていると考えられるが、詳細な生態はまだ不明な点が多い。県内でもこのような湿地が残る場所は西彼杵半島以外にほとんどなく、土砂の流入や植物の遷移過程でのススキなどの草本が侵入してくれば生息環境自体の変化にさらされる結果となり絶滅が危ぶまれる。

（松尾照男）

**シオアメンボ（アメンボ科）**

【絶滅危惧 I B 類（EN）→絶滅危惧 I A 類（CR）】



（シオアメンボ 雄）

長崎県には海棲アメンボ類が数種生息するが、どの種も絶滅危惧種に指定されている。本種は山口県から九州、南西諸島にかけて分布している。県内では佐世保市十九島から大村湾内の入り江、西彼杵半島、対馬にその産地が点在しており、どの地区でも水質良好で穏やかな小さな湾内に生息し、入り江から出ることはほとんどない。幼生の時期は群生するものの、成体になるにつれ個体数は減少していく。県内の海棲アメンボ類の中では、そのような小さな入り江状況の環境変化の危急さを踏まえ絶滅危惧 I A 類（CR）にランクアップされた。

（松尾照男）

**スジグロボタル（ホタル科）**



（スジグロボタル 雄）

**【絶滅危惧Ⅱ類（VU） ※新規】**

県内でのホタル科甲虫類は 10 種の分布が確認されていたが、11 種目として新たに発見された種である。近畿地方から九州に分布し神奈川県、埼玉県、宮城県などでも絶滅危惧種に指定されている。本種の生息環境はゲンジボタルやヘイケボタル等とは異なり樹林に囲まれた半湿地～湿地に依存し、ホタル類としては珍しい半水生のライフサイクルを持っている。全国的に個体数の減少が指摘されており、県内でも西部に位置する西彼杵半島の数か所で確認されているものの個体数は多いものではない。本種は、そこに生息する湿地性の貝類などの小生物を捕食し、種群を維持しているものと考えられるが当地での幼虫の食性などは観察できていない。湿地・湿原という限られた閉鎖空間に生息する生物には大変希少なものが多いが本種もその一例であり、カツラネクイハムシ同様に植物の侵入による乾燥化で消失する場合が見られ、本種の通年の発生にも大きな影響を与えているものと推察される。（松尾照男）

**トラサンドクガ（ドクガ科）**



**【絶滅危惧種Ⅱ類（VU） ※新規】**

草原性の蛾で、全国的にも限られた地域で確認されている。県内では、対馬(1960,2008)の散発的な記録と大野原(2008,2009)では時に多数得られている。しかし、平戸の野焼き草原では確認できていない。屋外での幼虫の食樹は未知だが、クヌギで飼育されている。人為的に維持されてきた草原に生息し、全国的にも分布が限られていることから新たに指定した。野焼きを含め草原環境の維持が必要であろう。

（西澤正隆）

**トガリウスアカヤガ（ヤガ科）**



**【絶滅のおそれのある地域個体群（LP） ※新規】**

草原性の蛾で、国内では新潟、福岡の極稀な記録があるのみ。県内では大野原（2008 他）の記録があるのみ。大野原では 2006 年～2013 年には 9 月に複数灯りに飛来した。しかし、平戸の野焼き草原では確認できていない。年 1 化。幼虫期については未知。人為的に維持されてきた草原に生息し、全国的にも分布が限られていることから新たに指定した。野焼きを含め草原環境の維持が必要であろう。（西澤正隆）

### ツシマキモンチラシ（マダラガ科）

【絶滅のおそれのある地域個体群（LP）→ 絶滅危惧 I B（EN）】



昼行性の大型美しいマダラガで、1982年に対馬固有種として記載されたが、最近、和歌山、広島などで確認され、海外では中国の記録もある。年1化。クリ、クミノミズキ等での訪花が観察されていたが、最近はその訪花例が確認されておらず、減少傾向にあるらしいが、その原因は不明である。屋外での食樹は未知だが、サカキで飼育されている。対馬以外では極散発的に確認されているだけで、今後、対馬での詳細な分布域、生態等の調査が必要である。（西澤正隆）

### マダラチズモンアオシャク（シャクガ科）

【絶滅のおそれのある地域個体群（LP）→ 準絶滅危惧種（NT）】



伊豆諸島、四国、九州～沖縄のいわゆる黒潮要素の地域に広く分布し、国内では4つの亜種が知られている。県内では四国～徳之島亜種として平戸黒子島（1957）の記録があったが、田平、平戸、生月、宇久、福江島など、広く分布していることが確認されている。また、県内には福岡県沖ノ島・壱岐・男女群島亜種も分布している。食樹としてオキナワテイカカズラの記録があるが、生態等のさらなる調査が必要である。個体数が少ない種だけに、現存の環境の維持が必要と思われる。（西澤正隆）